

あしを誘なう きはしらべ

流動する道しるべによって街の境界を消し、人々は無意識に足を進める。

硝子がつくる幻想的な道は、街と人をつなぎ、余白を彩る特別な空間となる。

影に映る足跡をたどりながら、それぞれが心地よい場所へと自然に導かれていく。

1. 背景

日本の伝統建築において、畳の目やへりは、壁や段差を使わずとも空間を無意識に仕切る役割を持つ。茶道では畳の目に沿って歩き、へりを踏まない作法があり、和室では畳の目に沿って座る、布団を畳の形に合わせで敷くといった習慣がある。これらは、ただの線が人の動きを導き、空間を分節する例である。この仕切り方は、壁や段差のように明確な境界を作るのではなく、空間の広がりを保ちつつ、自然に領域を分ける。そこで私たちは、物理的な要素に頼らず、**身体感覚を通じた仕切りによって、静かで緩やかな空間の変化**を生み出す点に着目した。

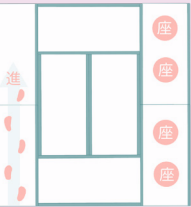
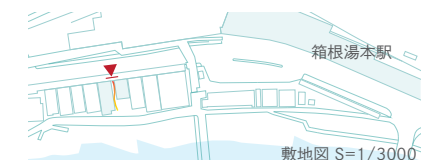
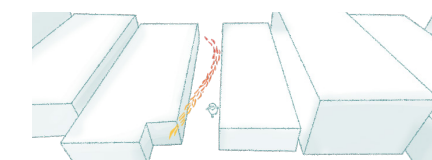
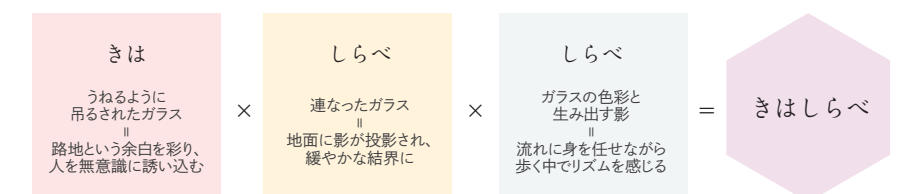
2. 提案

畳のへりが持つ「仕切り」「誘導」「リズム感」の三つの要素に着目し、それを空間に落とし込んだのが「きはしらべ」である。視覚的なリズムと誘導により、物理的な仕切りがなくとも、人の動きを自然に導き、流れるような空間を生み出す。本提案を通じて、人々が心地よい居場所を見つけるきっかけをつくり、まちと人との関係が豊かになる手助けをしたい。



3. 手法

「きはしらべ」の手法を利用し、路地に設置するアートインスタレーションを提案する。宙に浮かぶ流動的な形をしたガラスをテグスで吊るし、**余白を彩ることで無意識に人々を誘導する**。ガラスの色は、目を引く赤から希望を表す黄色へと変わり、風によって揺れたり光を反射したりしながら、居心地の良い場所へと人々を導く。透明でありながらも、存在感を持ち、空間の奥行きと動きを感じさせる。夜になると照明が加わり、ガラスが幻想的に輝き、昼間とは異なる表情を見せることで、時間帯ごとの移ろいを楽しむことができる。これにより、単なる路地が視覚的な誘導をもたらし、今まで気づかなかった新たな居場所や、心地よい**空間との出会いを人々に提供するきっかけを生み出す**。本提案は、**まちの風景に新たな意味を付与し、都市空間の豊かさを引き出す役割を果たす**だろう。



装飾ガラス
平面図 S=1/40